

(1) 困っている人について

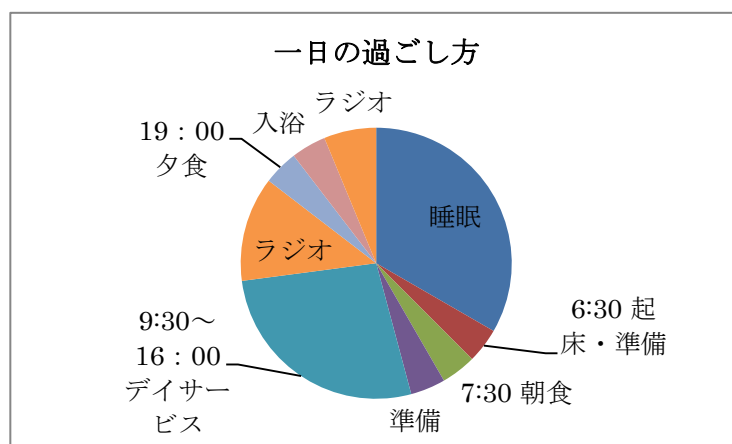
・年齢：86歳、性別：女性(文中では彼女、もしくは祖母と記載)

・同居家族は息子夫婦(息子：62歳、嫁：56歳)

・体の状況：以前から患っていた緑内障の進行が進み、ここ数年でより視野が狭くなった。家の中、家の周囲だけは勘を頼りになんとか一人で動くことができるが、外にでると介助なしでは行動できない。人の判別は難しく、目を開けている時は、明るい、暗いはまだわかるが、色ははっきりとはわからない。視覚障害1級の認定を受けている。5年ほど前より肺がんを患っているが、高齢のため進行が遅く、現在は抗がん剤の治療をやめ、月に1度通院している。

・生活：要介護2級認定を受けており、週に2回デイケアに通っている。施設では、食事、入浴、レクリエーションへの参加などのサービスを受けているが、視覚障害に関しての特別な支援は受けることができていない状況である。他の入所者と一緒に参加し、できることを見つけ、宿題をもらって帰ってくる。この施設では長期入所やショートステイにも対応しているが、夜間、慣れないところでの生活をするよりは自宅にいた方が良く、日帰り以外のサービスは受けたがらない。

一日の過ごし方について、朝は早く起き、衣服などは一人で着替える。息子夫婦と共に食事をとった後、春夏の日中、デイサービスに行かない日は、できる範囲で庭の草取り、野菜の世話などをすることもある。空いた時間はほぼラジオ、テレビを聞いて過ごす。秋冬になると、外仕事は無くなるので、ほぼ一日自室にこもりラジオ



を聞いて過ごす。以前は冬の手習いとしてたくさんの手毬を作っていたが、それができなくなり、とても悲しいと言っていた。夕食後も、ラジオを聞いて過ごすことが多い。

・しごと：5年ほど前までは、出荷用の野菜、米作りに励んでいたが、視覚の衰えと共に活動範囲が狭くなり、今では息子夫婦と一緒に家で食べる野菜を作る程度である。また、花がとても好きで、自宅の庭の手入れも意欲的にしていたが、体の衰えと共に、手が回らなくなってきた。

・思い：できるだけ人に頼りたくないが、見えないので、息子夫婦に頼る事を申し訳なく思っているという。以前は、ゲートボールの友人や、近所の友人との交流がたくさんあり、車も運転できたので自分でどこへでも行くことができたが、今は息子夫婦へ申し出て連れ

で行ってもらわなければならないので、気を使ってしまう。以前のように友達と話したいが、デイケアに行っている時は、大勢の中での会話が多く、だれがだれかわからない時があり、ひとりひとりの声を覚えるのに苦労している。また、庭や畑のことが荒れ放題になっていないか心配。代々ずっと守ってきた家なので、家で過ごしたい。

(2) 思いとニーズを支えるサービス

・行政による支援

彼女の暮らす村では、65歳以上の高齢者の医療費が無料化されている。このような取り組みは全国的にはとても稀だが、それが病気の早期発見につながり、結果的に高齢者の一人当たり医療費は全国に比べ低い結果となっているので、このような取り組みは有効である。

・地域の施設

高齢者のための施設としては、村内に3つの施設がある。二つの施設は長期入所からデイケアまで対応した介護施設で、入所定員は約80名である。もう一つの施設はグループホームで、1ユニット9人、2ユニットと小規模の認知症対応型グループホームである。この村の75歳以上の高齢者の数は平成27年10月現在、1194人(総人口の約16%)であり、今ある施設だけでは今後の介護ニーズには対応しきれない。施設の増設、もしくは住宅の福祉活用への対応が必要となってくる。

彼女のように、老化に加え、視覚障害をもつような、複雑な支援を必要とする高齢者に対して、現状の施設での対応は難しい。本人としてもいままで過ごした家での生活を大きく変えることは望んでいないので、覚えている環境を生かしながら、彼女が過ごしやすい環境を考えていく必要がある。

・家族による支援

彼女と同居する息子夫婦は、昨年より仕事を引退し、自宅での生活を中心としている。しかし、自室にこもりがちな彼女の様子や視覚障害に関する専門知識などがない事に不安を感じている。日々、視力の弱まる祖母に対し、色々と考えながら対応している。一方で、祖母の介護のために長期で家を空けられないため、旅行などに出かける機会が取りづらい事にも悩んでいる。今後は訪問介護など、外部のサポートを受けることも考えている。

家族と彼女の距離を近づけ、今後家族以外のサポートを受けるために、現在は住居の西奥に位置している祖母の居場所と外からの動線をスムーズにつなげるようにすることが必要だと考える。

・近所の友人

以前の彼女にとっての日ごろの楽しみの一つに、近所の友人とのおしゃべりがあった。目が見えていた頃は友人宅へ遊びに行くこともあったが、最近は減ってしまった。時々訪ねてくる友人とは玄関で立ち話をする程度。彼女が慣れ親しみ、自分で場所を把握して動ける範囲に、ゆっくりと人と対話のできる場所を作る必要がある。

(3)住環境や施設の計画

・以上のようなニーズとサービスを考慮して、祖母を支えるための住環境を、祖母の住まいのある敷地内で計画する。

現在、祖母が暮らす家は、23年前に建て替えられた鉄筋コンクリート造2階建ての家である。(図1)

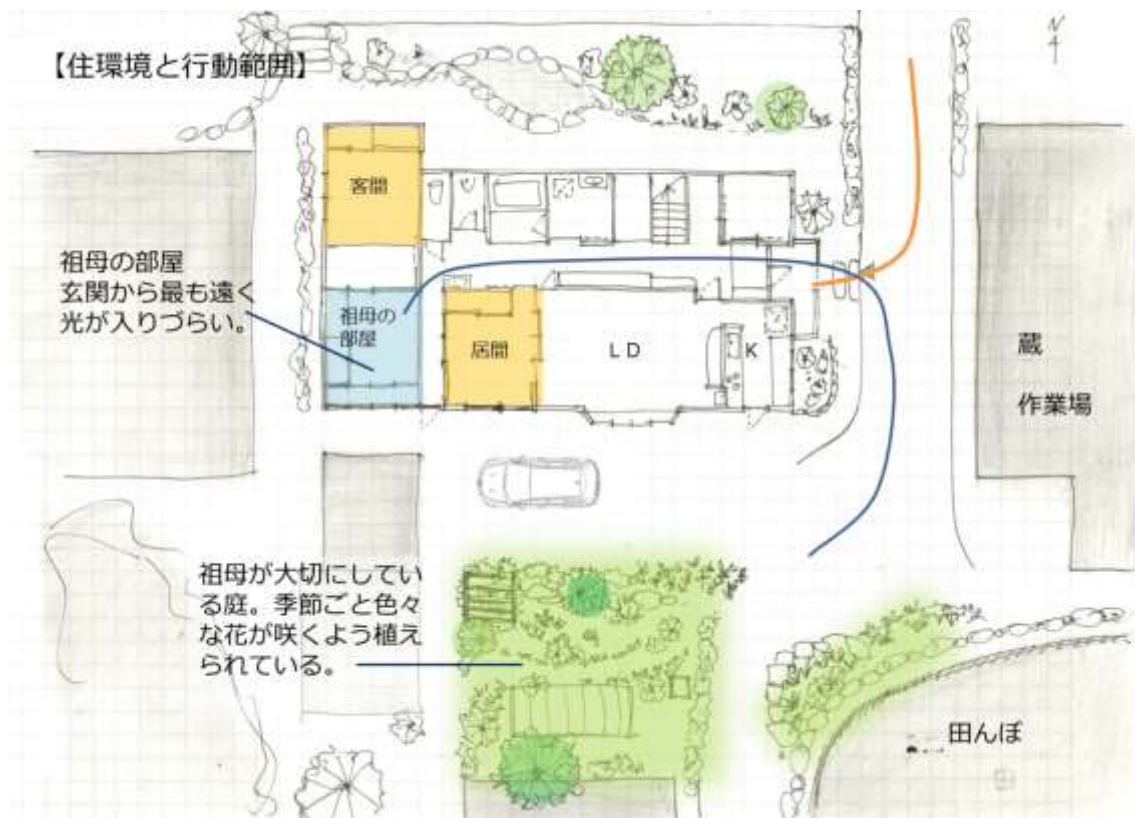


図1 現在の祖母の住む家の様子(一階平面図および配置図)

息子夫婦の子供3人は家を出ており、日中、人がいるのは一階のみである。北から南に傾斜した土地に建ち、建物は東西に細長く、南面の日当たりが良いが、祖母の部屋のある西面は隣家の植栽や倉庫に囲まれ光が入りづらい。また、玄関から祖母の部屋の距離は家の中でも最も遠く、祖母が自室にいるときは、祖母の気配を全く感じるできない状態である。また、祖母が丹精をこめて育ててきた庭と家との間の空間は駐車スペースとして使われており、庭は住居スペースから離れた存在となっている。

また、近所の集落の間では、この家の事をその立地の状況から「日なた家」と呼び、かつて宿屋を営んでいた歴史もある。この家がこのような人が集いやすい土地形状を持っている事から、祖母の居場所を中心に、地域の中の小さな交流拠点としての役割を持たせることはできないかと考えた。

ここで以下の提案をする。(図2)

- ① 祖母の日中の居場所をLDの続きの間に移動する。日中、息子夫婦の目が届きやすくな

る。空いた西端の部屋は、今後家族以外のサポートを受ける際、介護職員や知人の泊まる部屋とする。

② 祖母の居場所と庭、外部空間をつなぐデッキをつくる。祖母の居場所と同じ床レベルでデッキを張り出し、キッチン横の勝手口までつなげる。デッキでは、息子夫婦が将来カフェを開くことを検討。近所の友人もこのデッキから祖母の居場所へ直接アクセスする。デッキには 1/12 のスロープを設け、家族以外のサポート導線をスムーズにする。デッキの長手方向への手すりの代わりに、手の届く高さに植栽を配置する。

③ かつて息子の妻がやっていたピアノ教室をする人を見つけ、貸し出す。生徒はレッスンやお迎えの待ち時間をデッキで過ごす。

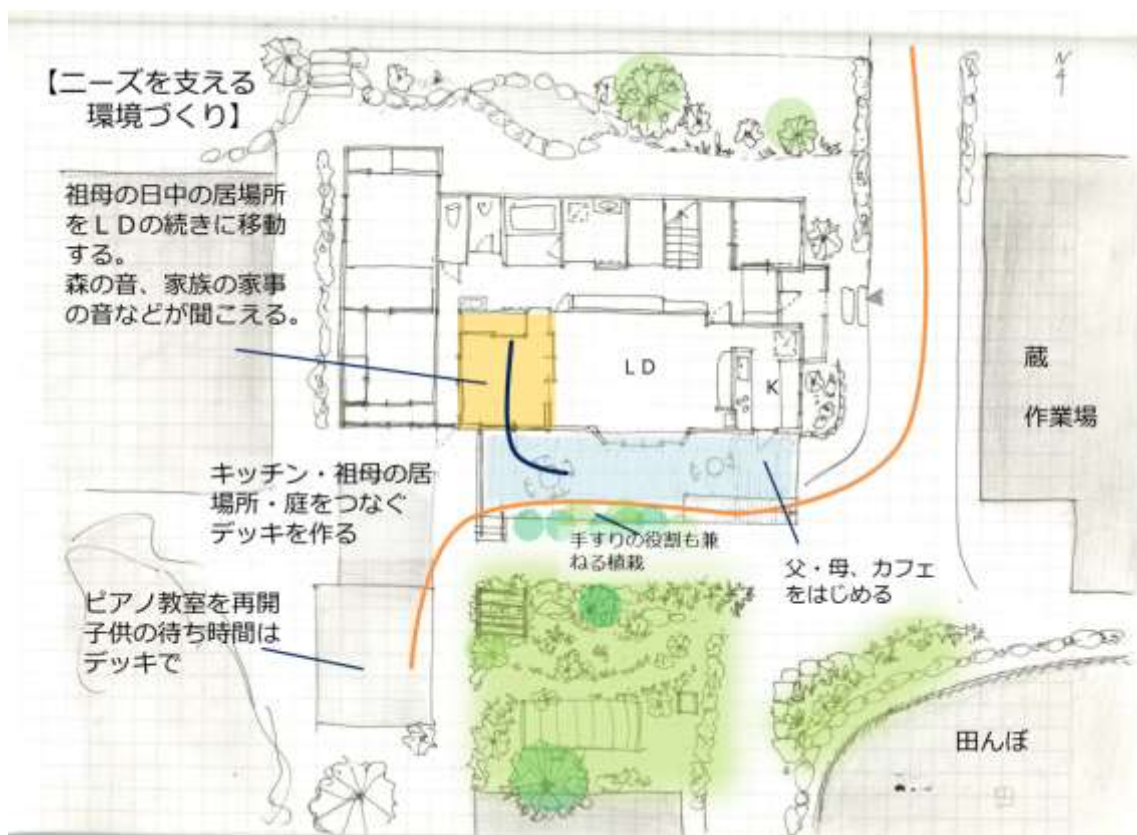


図 2

・祖母の暮らしを彩る企画

孫二人が結婚式を挙げた一年であったが、会場には行くことができなかった祖母のために、家族・親戚の人を招いてデッキで結婚披露パーティーを企画する。

① 祖母が触って質感を感じ取れるグッズの制作。

② 庭に咲いている花を、祖母の趣味で選んでもらい、祖母のイメージのフラワーアレンジメントを実現する。

② 声だけを聞いて、その声の主をあてるなど、祖母も一緒になって楽しめるゲームをする。

(4)イメージ図



(5)参考文献

- 1)『目の不自由な方を誘導する ガイドヘルプの基本』村上琢磨/文光堂/2006 年
- 2)『高齢社会のアクションリサーチ 新たなコミュニティ創りを目指して』秋山弘子/東京大学出版社/2015 年
- 3)『本人主体の「個別支援計画」ワークブック』大阪障がい者センター・ICFを用いた個別支援計画策定プログラム開発検討会編/2014 年